

ダンテ神曲の研究

未発表 抜萃

石倉小三郎

まず最初に私のダンテ研究は全部ドイツ文献によつたものであることを御断りしておく。わが邦におけるダンテ讃仰者の随一であり、その

研究に先鞭をつけられた先輩故上田敏先生はその著「詩聖ダンテ」の中で随処にドイツに於けるダンテ研究の精確さを称揚しておられる。「ドイツは由来学風の精緻なる国にして、翻訳註疏の良書に富めり。」「ドイツは十八世紀初年外国文学模倣時代に在つては、ライン対岸の評論に盲従して、趣味の独立なく、随つて未だダンテの妙工を賞する機あらざりしに、今世紀十九世紀に近ずきて、言語学の攻究と共にロマン文献学の一科起り精緻なる研究の末、終に世界文学に於けるダンテが光榮ある位置を認むるに至れり。ダンテ研究に対して貴重な創見卓論を貢献した者少からず。例えば釈義翻訳に於てザクセンの先王ヨハンの著書の如きは永く学者の尊敬信憑する所なり。」「然れども、ドイツは今疑もなくダンテ学の覇権を握れり。フィラレテス・ヴェイツの釈義は、抜群の名著にして、またブランクの「ダンテ辞彙」ヘッティンゲルの令名は人洽ねく知る所。ドイツに於けるダンテ学の精蘊深遠なるは、既に幾年の昔に編成せられたるものに、今日の学者

が参照して根拠とするもの多きを見ても、推知し得べきなり」といわれ、特にフィラレテスの名著を挙げておられる。

Philalates は Saxon 王 Johann の筆名で、王は一八二二年から Dante 研究に着手し、同二十八年にまず地獄十歌の翻訳を自費出版し、同三十三年に第二十四歌まで同じく自費出版されたが、一八三九年に至り Arnold 書肆がその大なる価値を覺つて地獄界全部を出版し、次で四〇、四九年に淨罪界天堂界を出版した。その後版權は Teuber 書肆に移つたが版を重ねる毎に註解は益々詳細精緻を極めてゐる。王は六六年に増訂四版を出してすぐ易簣しておられる。私の持っているものは九一年の重版物であるが、とにかく註解としてはこの書で十分であると思つて、全くこれのみに拠つてゐる。

Dante の一般研究として私の用いたるものは Kaver Hans 及び Conrad Falke のそれであることをのべておく。研究書の豊富なることは Goethe に劣らないであらう。けれども、今は手許にあるものだけに拠らねばならなかつた訳である。

ドイツ訳は十八種ある由であるが、今私は六種だけ持合せてゐるの

で、本書中に引用せるものはそれ等何れからも採っている。それは変化を求め且つわかり易いことを主としたので故意にやった試みである。その中に詩形もドイツ風に改めた自由訳もあり、また追想新詩作 *Nachdichten* もあり、私もわかり易さを主として自由に訳しているから、原詩とはかなり遠ざかったもののあることをお断りしておく。本書をよまれた諸君は、更に進んで山川丙三郎氏、竹友藻風氏等の正訳によって原詩の趣致を味読される事が望ましい。英訳では Longfellow 訳 Telly 訳がよからうし、それ等は古本で今求め得るであろう。Philates 訳は今求め難いであろう。私はドイツでかなり苦心して求めたのである。上田敏博士の「詩聖ダンテ」中山氏のダンテ研究にも大いに教えを受けたことを述べて感謝の意を表明する次第である。

固有名詞の読み方は、全部イタリア語よみに従いたかったのであるが、英独仏はそれぞれその国語のよみ方に従い、古典語はドイツ読みによったのが多い。わが国に通有な称呼のあるものはそれに従ったから、自然英語読みも用いられている。イタリアの地名さえミラノ、ヴェネチア等は誰にもわかるが、タイバー川のテヴェレとなると、イタリア語ではわれ等に少々耳遠い感じがする。凡てイタリア語にする方が原詩に敬意を表する所以であるかと思うのであるが、チームズ川のタミージ、セーナ川のセンナ、ライン川のレーノ等はいよいよ縁遠い感じがあるし、マインツ市のマゴンツァとなると、イタリア語専門の士でない限り我々としてはまごつかざるを得ない。それ故それ等は適当に取扱った。

ダンテを読みたいたがためにイタリア語も早くから心がけて、師にも就き自学とも試みたのであるが、結局は専門のドイツ語をもって教育に専念するのが私の大切な義務であると思つたため、イタリア語は数回中絶の後とうとう中途半端に終つた。一面音楽研究の機縁からイタリア語のもつ声調の美についてはある程度の認識はかち得たつもりである。研究は全くドイツ語によつたわけである。

ダンテも追放されなかつたら神曲は出来なかつたらうし、よし出来たとしても、今とは全くちがつたものになつたであろうことは確実に推測され得る。それ故追放の身となつて異郷に客死した世にも稀なる彼の苦難の一生に対し、世界はこれを悲しむと共に、感謝の誠意を捧げざるを得ないのである。そして私自身も晩年に於て追放されて全く隱遁の身となり本書が成り立つに到り得たことについては、運命の神に對する大なる感謝の念措く能わざるものがあるのである。

英語では *Divine Comedy* イタリア語では *Divina Comedia* といふことは分っているが、なぜこれを喜曲と呼ぶかについては大なる疑問であった。「神聖」というのは最高の讃辭であろうことは考えられるがなぜ喜曲というか、私などもその昔 *Comedy* といへば *Merchant of Venice* や *Moliere* もの「二づらいを知つたので、みなその様なものとのみ考えていた頃は、なぜこの詩が *Comedy* とよばれているかについて、非常に不思議に思つて、独りで思い感つていたものであった。尤もこれはどの *Dante* 研究書にもみな書いてある事であるが、それ等の研究書を知らない間は、ただ独りで考えてみたつて分らないから、ただ徒らに思い感つていたのである。それが偶然大学一

年の頃小泉八雲先生（ラフカディオ・ハーン先生）の英文学講義の中にこれに関する話が出て始めて分ったわけである。小泉先生については、同氏が松江中学に在任中日本に帰化して日本婦人を娶られた事は皆知っているであろうし、私も嘗て相愛学園の旅行で松江へ行つたとき、その地で厚く祀られていることを知って、さすがと思つたのであるが、その英語は奇麗な英語で専門学科ならぬ私には半分解らなかつたが、この詩に関する事は大体わかつた次第であつた。すつかり分つたのは厨川白村氏であつたらう。私などは氏のノートを借りて補つていたものであつた。昔咄をかいて氏の学徳を忍ぶのよすがとしたわけである。

喜曲というのは、この場合に於ては全く中世の意義慣習によつたものである。中世の詩学によれば、幸福に始まり不幸に終るものを悲曲とよび、不幸に始まり幸福に終るものを喜曲といつたのである。つまり Aristoteles の詩学よりはずつと広い意味に用いられているのである。「神聖」という冠詞は後代の人が讃仰の意を表現すべく添えたもので、イタリア語の慣用句として、凡て尊とき、美しき、気高きものをみな神聖 Divina とつたのである。古くは単に Com-media と呼ばれ、或は詩形によつて Le terze rime と呼ばれ、その歌旨の上から見て「夢物語」La Visione とともに呼ばれていた。一五五五年版に始めて「神聖喜曲」という名が用いられてから、近代に至つてこれがきまつた名となつたのである。またラテン語を用いずイタリア語を用い、皇天の讚美に瑰麗の辞を連ね、その間に人の不徳を責める皮肉嘲罵の語を挿んでいる事から喜曲とよばれるのであつて、そ

れは Dante 自身が「悲曲の形」にて詩材を取扱うときは口語の雅醇なるを撰びて Ode 「頌」を作り、喜曲の調うときは単に賤しき詞にて足ると俗語論の中にいつているのと相適うわけである。

然らばこの詩が、詩文中の何れの分類中に入れられるべきかは、極めて難かしい問題である。

Schelling がいつている様に神曲は単独な詩ではなく、新しい詩全体を代表し、且つそれ自ら独特なものであり、全く比類なきものであるから、特殊の詩形にあてはまるわけには行かない。神曲はそれ自身一つの世界であつて、独特の説を要求するから、簡単にその属すべき部類を決してしまふことは出来ない。それが単なる抒情詩でないことは誰にでもわかる。寧ろ叙事詩のうちに入れた方がよいかと思うが。一定の事件の連絡を歌つたものでなく、曲中の諸人物は相互の交渉なく、諸事象は、Dante の眼前を通過する走影の如きものであるから叙事詩とすることも当らない。劇詩と見るが適當かと思われるが、これも必ずしも適當ではない。首尾一貫せる動作を欠いていること、また Dante 自ら曲中の主人公となつているが、普通の意味の主人公としては活躍していないで、全く受動的 위치에その身を置いているから、この点ではむしろ叙事詩に近い。教訓的趣意が強く盛られているから、教訓詩であるとする人もあるがそれにはあまりに多様な意味が含まれすぎている。単独な問題を敷衍しているのでないから普通の教訓詩ではない。要するにその本質は大詩聖が自分の閱歴を傾けて、中世の宗教、哲学詩歌科学を渾成して自家独立の幻想を構成したものである。一つの完全なる宇宙であり、世界であり綜合芸術である。

神曲三界に於ける気分、国語及び場面はみなちがっている。その關係を Schelling は哲學的關係に於けるダンテについてこういう論文で次の様に論じているが、それは世界に認められて、どの Dante 研究書にも引いてある。

「地獄篇は彫塑的であり、淨罪篇は絵画的天国篇は音樂的である。地獄篇は材料に於てそれが最も恐ろしいものである如く表現に於ては最も強く深く文体に於ては最も嚴肅で、用語に於ては暗く且つ凄くすさまじい。一般人の知識も地獄篇にかぎられている様であるが、地獄篇中の最も有名な二つの場処を挙げて措くに止める。それいうまでもなく Francesca と Ugolino 個の場面である。

そこは邪謠の罪を犯した者が罰せられる処、狂炎黒沙を捲いて終りを知らぬ哀哭の聲は暗い空をめぐる。噪林（ほ、ど）鳥の大群が寒空に飛び散っている如くである。Dante の考に従えば邪謠の罪は人として免れ難い事であるから、不節度の罪の中でも最も罪の浅いものであるとして上層の圈に定められている。それは生の過剰であるが、また同時に大きな憧れの現われでもある。そしてここでは浅薄な肉慾そのものではなく真の愛の情熱が批判されているのである。生きている間に彼等がその情熱に捉えられて心が狂風に吹きまわられている様に、ここでは黒風瘴霧の中を外部的に翻弄されあてもなく漂蕩しているのである。その中に双影相抱いて Oate の立っているその断崖に向って近づいてくるものがある。これは父の利慾の犠牲となり、弟の Paolo をその人と思つて嫁いで見れば定められた夫は、似もつかぬ醜夫 Gianciotto であつたため、終に Paolo と不義の恋に落ち、そのため命を殞した

という物語の主 Francesca とその情人 Paolo との薄命の靈である。Francesca da Rimini と Ravenna の国王 Guido da Polenta の娘で才貌兼ね備つた一世の麗人であつた。十三世紀末のイタリアは戦乱止む時なく諸王侯はあらゆる秘策を弄して勢力恢復に没頭した。この様な時、最も多く用いられる手段は政略結婚である事は古今東西その規を一にする。Suido はその娘 Francesca を隣國の Rimini Ulatesta 家の嗣子 Gianciotto に嫁せしめようとする。Gianciotto は勇猛並びなき人であるが、世にも有名な醜人で剩れ破であつた。そこで父なる国王は Gianciotto の弟なる Paolo をして求婚の使たらしめる。Francesca は後庭の葉がぐれに Paolo の風姿をかいまみ、また侍婢たちの言葉信じて彼を未來の夫とのみ思ひこみ、大なる愛着の情を感じていた。さて白馬銀鞍、多くの侍婢達を従えて Rimini 家へ乗り込んで見れば、そも如何に、夫たるべき人は伝えもなき醜夫 Gianciotto 氣も狂乱の中にも、同じ館（やかた）に Paolo と語り合うことをせめてもの心慰のよすがとなり、終に二人は罪の恋に破れ、ある日人なき折、小亭に密会して共に恋の詩を読み語りあつてゐる時 Gianciotto は室内に闖入し來つて劍を揮つて Paolo を追う。これを遮ぎつた Francesca がまず最初の犠牲となつたので Gianciotto はいよいよ狂乱してわが弟 Paolo をも殺してしまつた。

この物語は当時の実事であつて既に Boccaccio の麗筆によつて世に伝えられ広く世に知られている話であつた。事は一二八八年頃に起つたといわれているから、Dante はよく知つていたであろう事は勿論の事であるが、Dante が Francesca と相識のなかであつたと、

Carlyle がその英雄崇拜論の中でいっているのは、Dante 研究のまだ進んでいなかった時代の誤りであると今ではいわれている。

二人の影はしかと相抱いて、相思の情いとも濃やかなりといわれるあの斑鳩のつがいの様に、心の導くにまかせ翼を張りて落すが如く、瘴烟の中を浮んで来る。Francesca がまず唇を開いて、

汝貴き君よ、親しくもいとよき君は、

おのが血もて人の世を紅に染めなし吾等罪囚を、

ゑび染の雲を犯して訪はせ給ふ、情のほどの嬉しさよ。

宇宙の帝若しわれ等の友ならば、

吾等こそ君が清寧を祈りまつるべけれ、

君はわれ等のこの恐ろしき過を憐み給ふが故に。

君は聞きもし語らんともし給ふが故に

吾等もまた君が語るを聞きまた君と共に語らなむ。

今のごと風の黙せるそのひまに。

わが生れし国は海のほとり、

ポー河の流が万河の水を従へて

来り安らふそのところ。

貴き人の心にこそいと早く燃え出づるてふ愛は、

わが美しき姿のためにこの君を捉へぬ、

その姿もはかなく消えて今は空し。そを思へば今なほ胸いたむ。

思はれてはその人に思ひをかへさではやまぬ愛は、

われをまた喜びもて強くその人へと結びたり、

かくてその人は見給ふごとくなほも離れず。

われ等二人を一つの死に導きけるぞその愛は。

またわれ等の命を絶ちしその人をばカイナは待つらぬ。

ツオスマン訳に従う。

カイナは地獄第九層の第一層で殺人の徒の幽せられている処である。われ等の命を奪ったジャンチオットはやがてこのカイナの獄に行くであろう。ここにわざわざジャンチオットの名を出していないところに、憎しみと軽蔑とをこめていることが窺われる。

転々糸を吐く如き麗人のあわれや今はその艷容も見られないのであるが、そのいぢらしい怨言に、ダンテの心もしめつけられるばかり、聞いていてだに痛哭に堪えない。このあたり一段の文字、哀調婉美、

千古に類なく神曲中の絶唱といわれている。ダンテも因果応報の嚴なるを今更のように覚えてしばし言葉もない。やがて彼はいう

——ああフランチェスカよ、君が悶えにわれまた悲しく、

貴き悲愁にぞ眼はぬるる。

さらば語れあまため息のその時、

愛は如何にして、また何によりてか

御身たちのひめたる願ひを明かにせしめたるよ？

之に対して答えるフランチェスカの言葉、テルツイーネー聯（憂の日にありて楽しかりし日を想ふばかり悲しきはなし）は世界的に有名なもので、また後世の詩人学者の間にこれほど幾多の模倣、敷衍、翻訳、批評をよび起したものは、世界文学中にもその類例がない。それ故原詩をここに示しておく。

.....Nessun maggiore dolore,

Che rieordasi del tempo felice
Nella miseria, e cio sa il tuo dottore!

Ua se a conoscer la prima radice

Del nastro amor tu hai cotanto affetto,

Faro come calui che piange e dice.

これに對してロセッティがこの詩形の原韻を得た訳は最もよく原詩の句を伝えてゐると称せられてゐるからそれをここに掲げておく。

(前掲の原詩＝聯のそのちあぢびじぬつ)

.....There is no greater woe

Than the remembrance brings of happy days know.

In Misery; and this thy

But if the first beginngs to retrace

Of our sad love can yuld thee solace here,

So will I be as one that weeps and says,

One day we read, for pastime and sweet cheer

Of Lancelat, how he fonn'd Lave tyrannous:

We were alone and without any fear.

Onr eyes were drawn together, reading thus,

Full oft, and still onr cheeks would pale and glow,

But one sole point it was that conquered us.

For when we read of that great lover, how

He kissed the smile which he had longed to win,

Then he whour nonght can euer from me now

For ever kissed my mouth, all quivering

A Galahat was the book, and he that writ

Uon that day we read no more therein.

悲しき日に楽しかりし日を

想ひ起すより悲しきはなし、

そは師の君も知り給ふ!

されどわれ等が恋のすぎこし所由を

知り給ふことが、せめてここにゐます君のために慰樂となるなら

ば、涙もろ共に語らなむ。

ある日われ等ただ二人、心の慰めにとて

ランスロットの恋物語を繙きつ、

四方に人なく、われ等二人の心は清かりし。

読みかはすうち、われ等は目を見交はしぬ。

顔色も青くぞなり行きにしか、

さばれわれ等の心を強くとらへしはただ一くきり。

あこがれてぞ待ちにし微笑のくたり、

かの恋人二人が接吻に及びたるそのよしを讀みて――

君は身をふるはせてわれに接吻せり。

かくてぞこの君はわれをはなれず、

その書こそ、またそを書きし詩人こそガレオットなりし、

われ等はその日またその書は讀まざりき。

ダンテはこれをきいて抑へがたい悲に捉えられる。傍に立っている

パオロの霊も涙にくれるばかり。悲愁その極に達して心神昏乱し、屍
骸の仆れるが如くに卒倒する。

フランチェスカの様な純情な少女の心情描写は浄罪界に於ても天堂
界に於てもあと若干出て来るのであるが、これはその当時の実話で詩
人も親しく見聞した事柄であったので悲惨ことに深い。彼女の告白に
よって筈勁高雅な筆致もて純情な少女の心に萌えそめた恋の情熱の所
因を写し、奔放な恋愛を叙しながら、毫も露骨な痕を残さない点が今
なおわれ等の心をうつものがあつた。後代の激賞してやまない所以もこ
こにあるのであろう。この場合、古い騎士物語アーサー伝説も忌むべ
き恋の媒介者とは思えず、彼女にとってはむしろ心の深奥の感情をと
きほぐしてくれた運命的な仲立ち役として考えられている。彼女は後
悔していない。地獄にいてもそれを悔んでいない。彼女の愛は今なお
幸福な不幸な悩みであり、しかもそれを永久に意欲していなければな
らないのである。ことに彼女のやさしい母の様な気持、「神がわが友
であるなら、君が為に静寧をお祈りしましょう」という一句は同情に
対するに同情を以てするもので、それがこの奔放な情熱の中にたとし
えなき清涼さを吹き入れている。ダンテが追放の苦難の間あまりに究
争にのみ耽つてゐる故国フィレンツェ市を思つて、常に心の静寧を求
めていたことは有名な事実である。「師の君も知り給ふ」の一句はそ
の解釈に就て古来学者間に幾多の説があるのであるが、これもヴィル
ギールに対する、あの會では高名なりし詩人が罪なくして地獄前界に
落されているその悩みに対する彼女の理解の心を示したものと見てよ

いであらう。

ランスロット物語は中世文学を貫流するアーサー伝説の中の一挿話
である。騎士ランスロットと女王ジネヴラとの道ならぬ恋の経緯は、
テニソンのアイディールズに精しく歌われているが、このあいびきの
媒をした者の名がガレオットである。しかし当時の伊太利の合言葉で
不義の媒介者のことをガレオットというていたから、ダンテが何れの
意味でここにこの言葉を用いたかに就ては説者の判断に任せする。
「この日また読まず」*Quel giorno pin non vi leggemo avanti*
と雙語を下して情熱の熾烈なるをほめかしたその手腕は、ダンテ独
特の靈筆として賞揚されている。

すべてこのあたり、浮世の横顔をあの世の鏡に映せしめる手法とし
て、多く省筆を用い印象的に描写したことも、一つの特記さるべき事
実である。それは前にも述べた様にこの話が当時の実話でみな人のよ
く知っていた事であつたから、そうしておいてもよかつたのであつた
であらうが、またこの様な物語を精細に事実に描写して人間性をあ
まりにあらわに出しすぎでは、全体の詩風を損なうから、そうして臚
にふせておかなければならなかつたのもあろう。何れにせよ鑑賞の
際特に注意すべき一事実である。

ほがらに親しき君は、

黙せる同情の力もて、

われ等が苦みあるその地を過ぎ行き給ふ。

神がわれ等を憎み給ふことを、

われにして若し知らざるならば、
君がため静寧をこそ祈らましを、
君わが悩みをいとよく理解し給ふが故に。

われ等は君が望ませ給ふ凡てを聞き凡てを語らん
あらき嘆きのここに黙せるまに、
嵐にわれ等の追ひ散らされぬまに。

ラヴェンナはわれを生み、愛はわれを打ち据えぬ。
愛はわが友の眼を

美しくかよわきわが姿にさめしめぬ。

愛は常にその報いを生むといふ

愛はわが心を彼に傾けぬ

彼はわがかたへを去り給はず。

愛は忽如としてわれ等に終焉おはりを与へぬ。

殺人の地獄は殺人の手を煩はしめたり。

これをふりかへり見るわが思や如何に

ああ、如何にしてぞ事は起りし、われは人妻にと定められたり。

あれど云ひこし人は他あたし人なりし。

その三人は後にしてそを悔ひたるなり。

わが夫はジャンチオット。われはフランチェスカ。

永久に替らずわれが友なる此君は、

パオロ。その兄のためにわれを求めぬ。

彼は美しくわれは純なり。

などか世のさがのかくはつれなき？

そは彼を悩ませぬ。われ等はそれにうたれて病みぬ。

われは語りぬ。「おお痛みよ、如何に甘き苦悩のおん身等二人を
失はしめし？

涙は湧くよ憂愁はわれを包むよ。

彼女は答へぬ。それ悲しくも美しかりし

ただ一と日。一と時いたましや、

永久にわれはそれを忘れず。

アルツス宮廷の物語を君知りや？

聖杯を求めて勇敢なりし騎士物語、

ランツエロットの秀でたる歌を君知りや？

国王の妃ジネヴラのミンネあふるる姿に魅せられて、接吻くちづけせし

と、あはれそこに精しく記されたり。

われ等は読みぬ、ただ二人、邪よしまの思はなく清かりし。

天国の幸を地獄の夜に落しやるてふ

暗き——あかるき力は思ひもせずて、

われ等はかくぞただ共にあらんとせし。

されどああ、書かみはわれ等を燃えしめぬ

われ等が眼はかたみに浮び合ひぬ。

魂はかたみに戦ひ、

憧れはわれ等を導き、愛はわれ等を駆りたてぬ。

かくてわれ等の女王の君の

彼をうちまかして微笑のくだり読みしとき、

炎は炎と並び立ちて——

ふるへつ、かの君はその唇もて

わが口に口づけしぬ。さてわれもまた、

かくてああ読むことは即坐に忘れ果てぬ。

トレンク訳原詩九一—一三八のあたり。

これは随分大胆な思いきったものである。世界的に有名な千古不磨とでもいふべき、「憂の日に在りて楽しかりし日を」の秀句は削除されている。

「わが生れし地はポー河のほとり」の条もない。併し全体的には近代的感觉が躍動している、韻は三行同韻である原詩九一行「宇宙の君がわれ等の友ならば」の条は原詩では *Se fosse amico* とあるのを「神がわれ等を憎んでる給ふことを、私が知らないならば」とやっている。原詩も訳も共に接統法温去を用いているから意味は同じではあるが、その受ける感じは大分ちがう様に思われる。

ドイツ訳としては世に認められている全訳が十八種ある。それぞれ特色あるものらしいが、如上の様な思い切った自由訳もあるのである。今私の手許にあるのはこれらのうちここにあげた外に三種だけで、私も十八種全体に及ぶ知識はもっていない。また私自身も自由訳を試みたい気もあつたのであるが、詩聖を冒瀆するであろうとの恐れから、それだけの勇氣は今はない。私は本稿を草するためには原文に忠実な、註釈の詳密な、否詳密すぎるところの、そして今は世界的古典となつているフィラレテス（ザクセン国王）訳一八九一年版に主と

して頼っている。

（本学教授——文学、独語）